

◆ 3館連携特別展「武家の古都・鎌倉」関連シンポジウム 基調講演 ◆

五味文彦さん講演「武家の古都・鎌倉とは何か」

平成24年11月11日(日)、きらら鎌倉(鎌倉生涯学習センター)ホールで、県立歴史博物館・県立金沢文庫・鎌倉国宝館で開催中だった世界遺産登録推進特別展の関連シンポジウムが開催され、五味文彦さん(放送大学教授・東京大学名誉教授)と清水眞澄さん(三井記念美術館館長・成城大学前学長)の基調講演と3館の館長を加えたシンポジウムが行われました。

今号では五味文彦さんの講演要旨を記します。

五味文彦さん 基調講演要旨

鎌倉の世界遺産への足取り

昭和60年(1985)に鎌倉駅西側の御成小学校の建て替えに絡んで今小路西遺跡が発掘され、鎌倉の古代の風景、武家屋敷跡が良好な形で残っていたことがわかり、鎌倉の考古学的発掘の重要性が広く認識されるようになる。網野善彦・石井進・大三輪龍彦の三氏を代表とする中世都市研究会が誕生し、中世都市研究が進んだ。

平成4年には「古都鎌倉の寺院・神社ほか」が世界遺産の暫定リストに掲載され、ユネスコ世界遺産センターに提出された。しかしながらその後は何度か推薦の機会がありながら、見送られていく。推薦が遅れる間に段々と世界遺産登録に関するハードルが高くなり、他地域との比較研究で、これまでの登録遺産と同じような価値ではなく、独自の価値を明確にしなければならなくなった。

武家の古都・鎌倉のコンセプト完成

平成13年に鎌倉市歴史遺産検討委員会が発足し、私はその委員長となった。改めて世界遺産を検討し、総合的に鎌倉の特質を考えるということから「武家の古都・鎌倉」というコンセプトを平成16年に固めた。その後国際会議を経て本年1月に正式な推薦書を提出し、9月にはイコモスの調査が行われた。主に保存管理についての調査だったが、その報告とコンセプトに基づく評価報告がイコモスから世界遺産委員会にされ、来年6月には決定する。

問題点

鎌倉では都市の遺跡に関わる発掘保存の体制がきっちりしていない。ほとんどが記録保存で、遺構は廃棄されており、発掘された木材も残されていない。1点1点

の遺物がゴミになってしまう。評価できないまま捨ててしまうことは大きな問題である。しかしながらこの点は、鎌倉の博物館や埋蔵文化財センターの構想によりながら、着実に進みつつある。

『武家の古都』なのに御所が入っていないというのも大きな問題だった。大倉幕府、若宮大路幕府など、幕府の跡がひとつも入っていない。これについては「中世の御所は簡便に造るので残っていない。そのかわり神社仏閣は整えている」と言い訳しているが、これからは大倉御所跡を国の史跡にするなどその性格をきちんと考えていかななくてはならない。

世界遺産になるとさらに多くの観光客が来るのではと心配する声がある。確かに今のままでは観光の波だけが押し寄せてきてしまう。たとえば、鎌倉に一泊して、朝の空気を吸って、古都の風情を感じるという場所がない。これまでと違って世界遺産のコンセプトを世界に発信できる観光の体制が必要だ。

古文書に見る「鎌倉」と、今後の課題

鎌倉の世界遺産で非常に重要なのは『吾妻鏡』という歴史書があることだ。平泉の登録の際も、『吾妻鏡』に記述されていることが重要視された。

『吾妻鏡』文治二年(1186)八月十五日条では、西行が鶴岡八幡の鳥居の辺りにいると聞いた頼朝が、西行を招いて話をすることが書かれている。建暦元年(1211)十月十三日条では、鴨長明が三代將軍実朝に会いにきて、頼朝法華堂に行き読経し、一首の和歌を詠み柱に残したことが書かれている。ここからわかるのは、鎌倉は実朝の時代には京都の文化を積極的に入れていることだ。

北条泰時の時代になると、『海道記』と『東関紀行』にも鎌倉の繁栄ぶりが書かれている。

その次の段階は建長寺や円覚寺が造られるなど、京都を超えて大陸文化、特に禅宗を積極的に取り入れる時期だ。そういうところをやってきたのは京都の後深草院二条で、『とはずがたり』を著した。繁栄する鎌倉を女性の目で見ている。吉田兼好の『徒然草』には、鎌倉の繁栄に対し批判的な眼がある。それだけ鎌倉は独自の成長を遂げたといつてよい。

鎌倉では、基本的には700年にわたる武家政権の基礎となる「さむらいのスピリット」というものが育てられてきた。また一方では「死」という問題もある。今後は負の遺産も直視し、いいところを把握して考えていくが必要になるだろう。